

第6回 応用Harmonizing①

前回までにて基本及び実践のHarmonizingを習得してきました。ここから先の応用Harmonizingを学ぶにあたり重要な事項を再確認する必要があります。Harmonizingでは「アプローチトーン」の確実な認識が要求されます。これは同時にセンタートーンの確定にもなります。そもそものメロディ（他パートならばトップノート、オブリガート、裏メロディなど）が脆弱な場合はHarmonizingが無理なこともあります。センタートーンとアプローチトーンの関係性を十分に把握したメロディ構築のスキルなくては、ここから先の応用Harmonizingを学んでも実践には生かされません。不十分な知識とスキルで応用Harmonizingを使用するとかえって音楽を破綻させてしまうこととなります。これまでのスキル、知識の十分な習得が一層不可欠になることは肝に銘じてください。

応用Harmonizing

一旦組み上げたアプローチコードは次の技法で変形、改変させることができます。

これらの技法は自由に組み合わせて使え、メロディ構築の自由度が大幅に高まります。例えばアプローチトーンの連続禁止、アプローチトーンの2度以内での解決など、これらの技法により禁則事項が開放されより自由なメロディ構築を可能にすることができます。

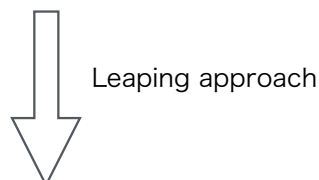
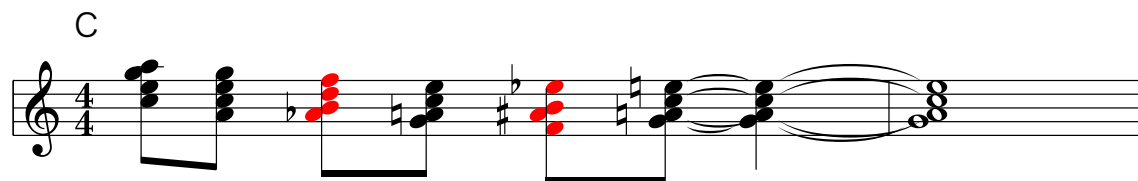
しかしながら何度もいいますが、これらの技法を用いる大前提として「明確なアプローチトーンとセンタートーンの把握」「決して破綻していない十分に音楽的なメロディ構築のスキル」が身につけていなければなりません。また、当然そのメロディを支えるコードスキル、特にテンションコード、リアルマイナースケールシステムの十分な知識が必要不可欠であることを再確認してください。

まずはメロディ構築時にて関連性の高いLeaping approach、Omit free、Delayed approachについて解説します。

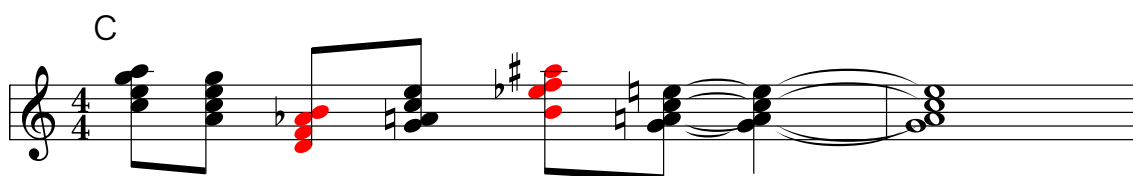
Leaping approach

【定義】一旦組み上げたApコードを任意にInversion(転回)できる。

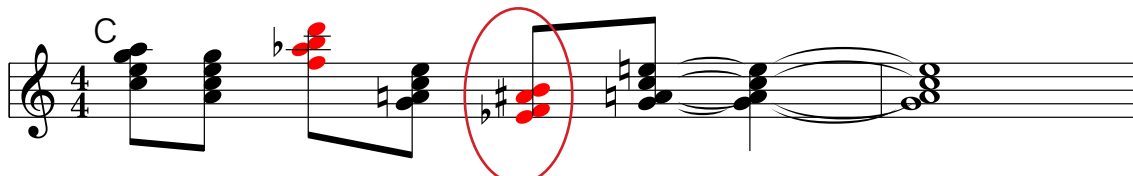
p.13 【3-1 Etude1】からのHarmonizing②での一例からLeaping approachを用いてみます。



【3-6 ex1】



【3-6 ex2】

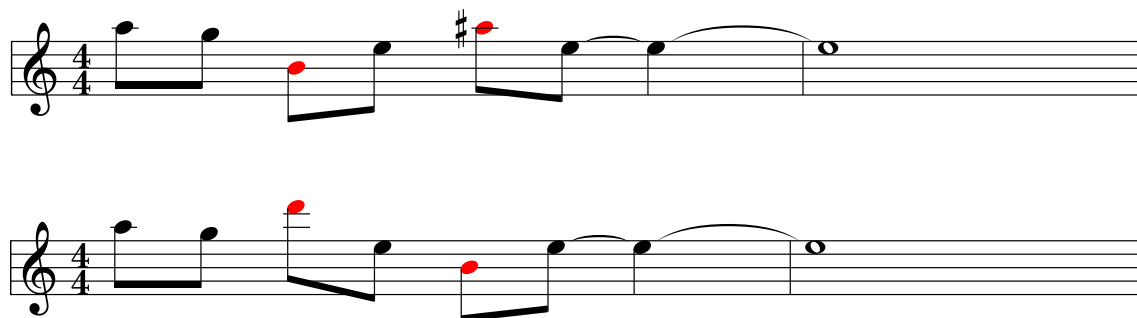


クラスターコードになっても良い

Leaping approachによって再構築されたApコードは通常ではなるべく避けるクラスターコード型になっても使うことができます。

ここからTopノートを抜き出すと、元のメロディからの改変が確認できます。

Leaping approachにて合理的なメロディ改変ができる



この例ではDim.AとADAにてLeaping approachを使いましたが、もちろん他の全てのApコード、Do.A、STA、Ch.Aに適応させることが可能です。

Omit free

【定義】一旦組み上げたApコード構成音を任意にOmit(省略)できる。

Harmonizingの初期状態は4和音です。求めるサウンドに応じて適時ApコードをOmitさせることができます。当然ながらCtトーンでのハーモナイズコードもOmit可能です。

【3-1 Etude1】

4voice

3voice

2voice

【3-6 ex1】

4voice

2voice

【3-6 ex2】

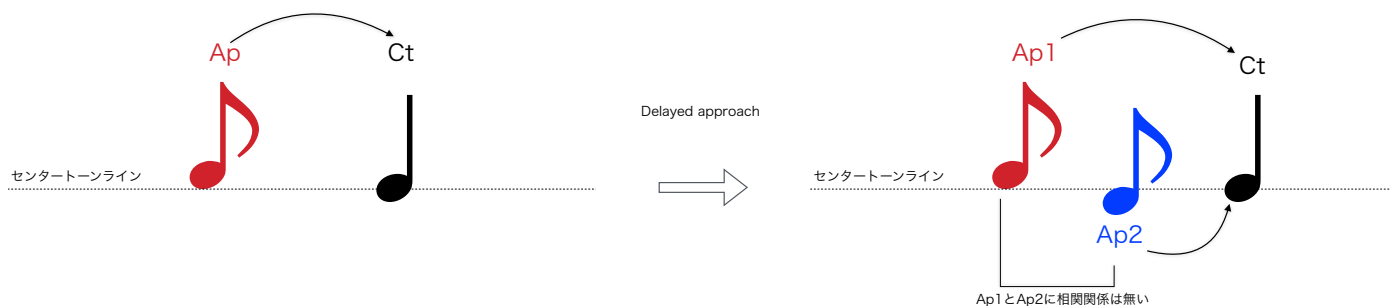
4voice

2voice

注意) Ctトーンでのハーモナイズコードにおいては当然トップノート＝メロディ以外の音をOmitします。
トップノートをOmitすることは根本的なメロディを変えることになります。

Delayed approach

【定義】 ApトーンがCtトーンラインを一旦飛び越して再アプローチする。



図からわかるようにDelayed approachにて新たなAp2を作り出すことができます。この時、Ap1とAp2はCtに対しそれぞれ独立したアプローチハーモナイズを行うこととなります。つまりAp1とAp2は無関係な存在となります。

実践では、一旦組み上げたメロディからの改変でDelayed approachを用いるよりも、メロディ構築時にDelayed approachを意識したフレーズを作るほうが多いでしょう。特にAp2が増えることによる音価の変化(メロの時間的な変化)には気をつけなくてはなりません。